

土曜参観の代休に合わせてショートトリップ

6月19日(土) オンラインによる土曜参観が実施されました。この日は、3時間授業で、そのうちの2, 3時間目を参観してもらいました。もちろん参観と言ってもコロナの影響で、保護者は来校できません。オンラインで各家庭に教室での授業の様子を配信しました。

1時間目の国語のあと、2時間目の算数「暗算」の授業と3時間目の道徳(友だち屋=友情・信頼)の授業を見てもらいました。教室には親機としてPCを1台その他、ipadを2台準備し、子どもたち全員が映るようにして授業を実施しました。クラス児童は15人、算数、道徳両方を合わせて全員が発表できるように授業を進めました。算数では前に出て、暗算のやり方を子どもたちが説明したり、道徳では、友だち屋をするキツネについて話し合いをしたりしました。zoom配信による授業なので、保護者の皆さんの反応が感じられないのが残念でしたが、後日連絡帳にて、「子どもたちの普段の様子がよく分かりとてもうれしかったです。」との感想と労いの言葉も添えられていて、なかなか直接会えない保護者との距離が縮まった感じを受けたのです。

韓国を歩くその④(世界遺産百濟歴史地区)



さて、土曜日の代休で月曜が休みになったので、日曜日今年度派遣された若者を誘って、百濟の遺跡を巡る世界遺産の旅に出かけました。

もちろん今回も列車による鉄道旅です。直線でそれも韓国新幹線 KTX で行けば1時間で到着する距離だったのですが、ぐるっと西側の黄海沿いを迂回するような経路を選択。若者も約3時間半の列車の旅を楽しんでいました???

ソウル龍山駅9:40発の特急セマウル号に乗車し、旅がスタート。ゆったりとしたシートに身をゆだね、韓国の田舎の景色を見ながら列車の旅を楽しみました。龍山駅を出発するとわずか2, 3分で漢江を渡ります。それから約1時間はソウル釜山を結ぶ幹線を都会の景色のまま進んでいきます。天安駅まで来ると、進路を西に向け急カーブ、長項線に入りました。ここからが古き良き?日本の風景に似た感じの韓国の田舎風景が続きます。

12:45この路線の名前になっている長項駅を過ぎると錦川の河口、大きな川を渡りました。この川の上流約30キロの内陸には、扶余という百濟の古都があります。この川扶余(プヨ)まで行くと**白馬江**とも言い歴史の舞台です。日本では**白村江**と習いました。663年の「**白村江の戦い**」まさにその現場です。この列車旅のハイライトでもありましたが、この広い錦川の河口こそ、**白村江戦い**の場所だったのでしょ。さて、長い列車旅も、錦川を渡り進路を東にとり、約20分、最後に南側からまきこむように北に向かって終点益山(イクサン)駅に入線。13:11到着しました。

①双陵（百濟第30代の武王とその妃 善花公主の墓）



すでに時間は、午後1時過ぎ。駅前の有名なカルグクス（韓国の麺料理）屋さんでカルグクスとマンドゥ（餃子）を頂きました。その後、タクシーに乗り、3つの世界遺産見学に出発しました。この日チェックしたのは、①双陵②王宮里遺跡③弥勒寺址です。

まずは、駅から一番近い双陵へ。2基の墓が200mほど離れて並んでいるので、双陵と呼ばれているそうです。北側にある方は大きいもので、南側にあるものは小さいものです。地球の歩き方には世界遺産として紹介されていましたが、現地でもらった資料では世界遺産にはなっていませんでした。

その資料によれば「発掘調査の結果、扶余の陵山里古墳群より規模が大きいので、王陵級の遺跡である」ことが分かったと書いてありました。出土した遺骨の分析結果から、被葬者は、百濟第30代王である武王とその妃である可能性が高いと見られているそうです。



この日は、参道ではなく参道と並行する

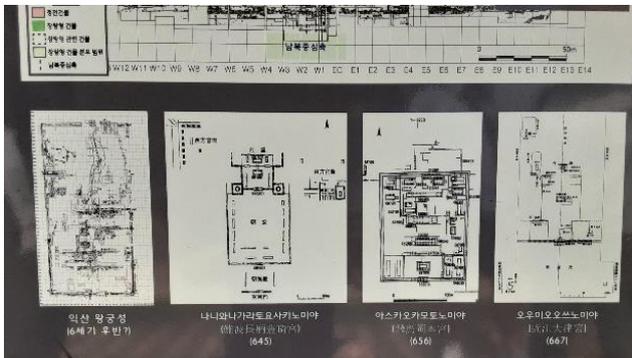
道路を進み、北側の大きい陵墓のすぐわきにタクシーを横付けしてもらいました。道路からわずか5、6mの林を抜けると、目の前に芝生に覆われた大きい方の陵墓が現れました。そこから、少し西に向かい小さい方の陵墓をめざしたのですが…。小さい方は、バリケードで囲いがしてあり工事中？囲いの合間から芝生がない小さな陵墓を写真に収めました。タクシーの運転手も一緒に歩いてくれ、案内してくれるのですが韓国語なのでチンプンカンプン。野苺が咲いており、それを取って食べられることをアピール。4人ともこわごわ口に運んで、双陵の見学を終了したのでした。

②王宮里遺跡（ワングンニユジュク）



タクシーに再び乗り、次の見学地「王宮里遺跡」（ワングンニユジュク）へ。ここは正式に世界遺産と現地資料にも書いてあり、入り口には世界遺産を示すレリーフ（碑）がありました。

王宮里遺跡は、百濟末期の武王時代に造られた宮殿跡です。南北に492m、東西に234mの広さがある百濟時代の最大規模のものです。幅3mの城壁を配し、内部傾斜面に4段の石垣を築いています。



(日本の宮殿に影響を与えたと分かる資料)



その中に政務空間、生活空間、後苑空間を配した城跡の遺跡です。資料には、「宮城としての役割を終えた後は、王宮里五層石塔を中心に1塔1金堂様式寺院としてその性格が変化すると推定される」と書かれていました。

左の写真の現在も残っている石塔を中心とした寺院であったようです。この石塔は、関連した文献資料がなくて造営履歴が正確ではないそうですが、発掘調査当時、塔の周辺で「大官寺」「官宮寺」「王宮史」などの名門の瓦が出土。これにより「三国史記」(武烈王8年=661年)の大官寺関連記録から、宮城として使われたものが、義慈王の前後に寺院に化したと見られているようです。

いずれにしろ、目に見える遺跡は左の石塔だけで、年代は分からないものの、木造の建築物燃えたり朽ちたりするが、石は後世に残るものが多いと認識できました。

このあと、あまりに広く、この日の気温が30℃以上あったこともあり、石塔のまわりを1周して戻りました。

ずっと、タクシーの運転手さんが同行してくれていました。先ほどの双陵同様、色々なことを案内してくれるのですがなかなか理解できず、ただ、寄り添ってくれるところに、安心感と親近感がどんどん沸いていったのです。

そんな中出口で、案内看板(資料)を発見。ここでも、運ちゃん指差ししながら説明。この資料には場所が日本語で書かれていたこともあり、何となく言っていることが分かったのです。

この百濟時代の最大級の宮殿が日本の645年の難波長柄豊碇宮→656年飛鳥岡本宮→667近江大津宮に影響を与えたことが理解できました。

近くには国立益山博物館があったのですが、改装中?で入れず、インスタ映えしそうな、韓国語でイクサン(益山)文化財夜行と書かれたフレーム前で記念写真を撮りました。

③弥勒寺址（ミルクサジ）



（西塔、東塔の間に標高 429m弥勒山が）

最後に見学したのは、弥勒寺址（ミルクサジ）。百濟時代最大規模の寺院跡で、百濟第30代王＝武王によって建てられた東洋最大かつ最古の国家寺院。資料には、「三国遺事」によると武王とその妃＝善花王妃が獅子寺に行く途中、龍華山（現在の弥勒山）の麓の大きな池の中から弥勒三尊が現れ、これを機にその場所に寺院を建てたと書いてありました。

王妃の懇願により、池を埋めて、そこに仏堂（金堂）、塔、回廊などを建て、この寺院を、弥勒寺と名付けたそうです。



（百濟の王と新羅の王妃のロマンスの池？）

特に西塔は、長年の非公開で修復が続いていましたが、2018年6月修復が終わり再公開されていました。この西塔は東洋最大最古の石塔で、木塔から石塔に変化する過程を示す韓国石塔の大元になっているようです。2009年の解体補修過程で金銅舍利外壺、金製舍利内壺、舍利奉迎記など19種9700点余りの舍利荘嚴が発見され、これらの出土品は、できたばかりの国立弥勒寺址遺物展示館に陳列されています。ここもドライバーの案内で見学しました。



百濟は紀元前18年から660年まで700年余りの間存在した韓半島（韓国では朝鮮という言葉好まれず、使わないのが常です）の古代国家の一つです。663年の白村江の戦いは、日本の初めての対外戦争。百濟は唐、新羅の

連合軍の前に660年滅びますが、再興を欲する遺臣の救助要請により、斉明天皇が決断、出兵します。しかし結果は、倭軍が唐軍に惨敗。

実際列車で最後に渡った長さ800mほどの橋は、錦川（白村江）の河口。かなりの広さで、そこから、今回の遺跡までは、直線距離で15キロほど。この地理的位置関係からしても、白村江の戦いの舞台がここではと想像します。唐の歴史書「旧唐書」に書かれている「唐軍は倭兵と白村江で遭遇、4戦する内、倭軍の船400隻を焼き、戦場となった海域は、倭軍の血で真っ赤に染まった」と書かれています。そこに百濟王と新羅の姫のロマンスも付け加わり、歴史絵巻に心ウキウキの旅でした。

駅へと戻り、駅前中華料理屋で反省会を開いて、KTXで1時間帰路につきました。